

8510 男は一たび外に出ると、・・・

男は一たび外に出ると、七人の敵と差し向かうといわれています。仕事に追いまくられ、騒音と排気ガスの中を駆け巡り、ときどき腰を降ろして飲む喫茶店のコーヒーは、たいていは商談のためのものですから、銀貨を碎いて飲んでいるように味気ないものです。

もちろんそのきびしい仕事の世界に生きがいを感じ、情熱を傾けて過ごしているのですが、一生懸命働けば働くほど、聰明に、快活に、立派に仕事をやり遂げるほど、男たちは一日の任務を終えるとき、がっくりと疲れがでるのです。

わが家の玄関の扉に手をかけるときの彼らは、もう課長でも副社長でもなく、また将来を有望視されているエリート社員でもないのです。

今田 美奈子：料理ぎらいの料理の本

[許容訳例]

It is said that once he is out in the world a man must face countless enemies. His work drives him to rush about among noise and exhaust fumes. Even if he at times sits down to drink a cup of coffee in a cafe, it is mostly for some business discussions, and the coffee is as tasteless as if it were a ground silver coin.

Men, of course, as they make their way through life, find something to live for in the tough world of work and devote their enthusiasm to their jobs. But the harder they work, and the more intelligently, vitally, and skillfully they do their jobs, the more exhausted they feel at the end of their daily task.

When they open the front-door of their home, they are no more the section chief, vice-president, or the promising elite staff.

[翻訳例]

It is often said that outside the home a man faces nothing but enemies. He is hounded by work; he rushes to and fro amidst noise and exhaust fumes; if he relaxes over an occasional coffee in a coffee shop, it is almost always for some business discussion or other, so that the stuff he drinks has all the savor of ground coins.

Most men in their daily lives, of course, find a sense of purpose in the though world of work and devote themselves to it enthusiastically, yet the harder they work, the greater the intelligence, energy and accomplishment they bring to the job, the greater is the sense of letdown and fatigue once the day's task is over.

When they open the front-door of their home, they are no longer the section chief, the vice-president, or the promising young member of the business elite.

■男は一たび外に出ると、七人の敵と差し向かうといわれています。 (8510)

★ 「男は・・・」はここでは「集合としての男」ではなく、「個々の男」がイメージされているので代表単数で a man がいいです。

★ 「男は一たび外に出ると」は、 once を使うと完了のニュアンスが強くなります。したがって、たとえば、 Once he has come, we can start. は Once he is here, we can start. ということになります。この「外に出る」は go out では物足りなく go out into the world (動作表現) なら使えますが、この真意は「外に出ると・・・する」というのではなく、「男は外に出ていているときには、七人の敵と差し向かっているといわれています」と状態に解すべきではないかと思われます。したがって、 Once he is out in the world と状態表現にする必要があります。その意味で outside the home と訳すことも可能です。

★ 「七人の敵」ですが、英語で seven enemies と数詞を用いると、具体的に「七人の敵」をあらわしてしまいます。この真意は「たくさんの敵」ということですから、 countless か、 any number of とか、「多くの」という意味合いの言葉を使えばいいでしょう。また、「敵だらけ」という意味で nothing but enemies も使えます。

★ 「差し向かう」は簡単に face でいいですが、 grapple with ~も使えます。「敵と差し向かう」は、他に fight with [against] enemies/ struggle with enemies も使えます。 close with ~もありますが、これは少々古い言い方です。

◆ 「・・・と言われている」

「・・・といわれています」は It is (often) said that…でしょう。なお、 They say…は使えますが People say…は必要以上に何か具体的なことを述べる感じになります。ここでは使わない方がいいでしょう。

■ 仕事に追いまくられ、騒音と排気ガスの中を駆け巡り、ときどき腰を降ろして飲む喫茶店のコーヒーは、たいていは商談のためのものですから、銀貨を碎いて飲んでいるように味気ないものです。(8510)

★ 「仕事に追いまくられる」は「人」が主語なら be hounded by work が使えます。 hound は「猟犬で駆ける；しつこく追求する；けしかける」という意味の言葉で、たとえば、 I am always being hounded by publishers. のように使います。なお、「仕事に彼は追いまくられる」は「仕事」を主語にして His work drives him to rush about…と訳すことも出来ます。「追いまくられ」を表すために always を加えるなら is always driving…と進行形にすることになりますが、これは「ショッちゅう、繰り返し・・・」という感じになります。

★ 「「騒音」と排気ガスの中を」は among [amidst] noise and exhaust fumes です。普通に「騒音」という場合は、抽象名詞として noise とした方がいいです。辞書には「排気ガス」は exhaust; exhaust gas; waste gas が出ています。 exhaust; exhaust gas でもいいですが、 exhaust fumes が英語的です。

★ 「駆け巡る」は「忙しく駆け巡る」ということでしょうから rush about to and fro [hither and thither] です。なお、 run around なら使えますが、 run about は単に「あちこち走り回る」という意味で、「忙しく」というニュアンスは入ってきませんから、ここでは使えませ

ん。

★「ときどき」は at times; occasionally ですが、これは「ときどきのコーヒー…」(occasional coffee)のように形容詞に変える方が英語らしくなります。

★「腰を降ろす」は sit down です。

★「飲む（コーヒー）」→「コーヒーを飲む」は drink a cup of coffee でしょう。

★「喫茶店」は a café でも間違いとは言えませんが、英米では a café というと「軽食堂」を指すことがありますから a coffee shop とした方が無難です。

● [して] (腰を降ろして飲むコーヒー)

「腰を降ろ [して] 飲む（喫茶店のコーヒー）」の [して] は「動作順次」で and も使えそうですが、「喫茶店で腰を降ろす」のは「コーヒーを飲むため」ですから、この二つの動作は「因果関係」と解釈するのが普通です。したがって、「主動詞(sit down) + 句(to drink ~)」で処理します。

★「たいていは」は mostly; almost always; usually などです。

★「商談」は、普通、英語では (a) business discussion か business talks と言います。ここでは some business discussion (or other) でいいでしょう。

★「～のため」は for ~ でしょう。for the sake of ~ も使えますが、on account of ~ (～のせいで) はここでは使えません。

● [から] (たいていは商談のためのものです [から])

ここでは「から」の前が長いので since…; as…とするのは無理です。単に and にするか、…, so[that]…と続ける方が情報順になっていいでしょう。

★「銀貨」の「銀」は silver ですが、強いて silver coin と訳すには及ばないし、訳す意味もないと思います。「金貨」とか「銅貨」ではなく、「銀貨」にしたのは筆者が女性だからだろうと思われます。

★「銀貨を碎いて飲んでいるように…」はそのままの形で英語らしい表現にするのは無理です。「(飲むコーヒーは) 碎いた銀貨の(味) ように…」として as if it were a ground [crushed] (silver) coin とするといいと思います。なお、as if…を使うと、as…as if…の形になりますが、どういう形容詞を入れるか難しいです。

★「味気ない」は「味がない」(tasteless)とは異なるのですが、辞書には How can you say something so tasteless? (味気ないこと言うなよ) というような例がでていますから、間違いとはでしょう。そういう意味では、やはり、ちょっと意味がずれますが dull; flat; dreary なども使えますが、irksome (面倒な・やっかいな e.g. irksome task; irksome duty); wearisome; weary (退屈な) などは使えません。このような場合には have all the ~ を使うのがいいのではないかと思われます。この表現は、たとえば、This novel has all the interest of a telephone directory./ She has all the beauty of a Medousa. のように、all の後に来る言葉の反対の意味を強める言い方です。ですから、has all the savor of ground coins と言うと、ここでは‘savour (風味・味わい) がまるでない’というわけです。あるいは、もうすこし簡単に have no more

savour than ground coins としてもいいでしょう。この savor という言葉は必ずしも食物だけでなく、たとえば、動詞に形で to savor the beauty of a sunset のようにも使います。

● 「もの」の訳

「(コーヒーは) 味気ないものです」は、簡単に the coffee is as tasteless as…でもいいですが、「…もの」を生かすと, the coffee [the stuff] he drinks (has all the savour of ground silver coins と書くことが出来ます。stuff は「(漠然と) 物; 食べ物; 飲み物」の意味ですが、これを使うと「何だこりや」とちょっと軽蔑するような感じがります。たとえば、非常にまずいものを口にしたときなど、What's this stuff?と言います。

● 「連体修飾節+体言」(ときどき腰を降ろして飲む喫茶店のコーヒー)を(even) if…節で処理する

「仕事に追いまくられ」以下の文章はよく読むと「仕事に追いまくられ」とほぼ同格的に「騒音と排気ガスの中を駆け巡り」と述べられています。つまり、「仕事に追いまくられながら、騒音と排気ガスの中を駆け巡り」という意味ではなく、「仕事に追いまくられ」の一事例として「騒音と排気ガスの中を駆け巡り」が加えられていると考えることが出来ます。つまり、「追いまくられ」「駆け巡り」「ときどき腰をおろして飲む喫茶店のコーヒー」は三つの事象を並列したものですから、「ときどき腰をおろして飲む喫茶店のコーヒー」は、確かに「連体修飾節（ときどき腰をおろして飲む）+不定代名詞的体言（喫茶店のコーヒー）」ですが、「ときどき腰を降ろして」は前の「駆け巡り」と対照して「ときどきやれやれと腰を降ろす」という感じですから「喫茶店でときどきやれやれと腰を降ろしてコーヒーを飲むことが〔あったとしても〕、それ〔そのコーヒー〕は…」と解釈するべきと思われます。ですから、この「連体修飾節+体言」は、文脈から「名詞+関係詞節」ではなく、事態の一つとして「讓歩節((even) if)」で処理するのが適切ということになります。単純に even if he at times sits down to drink a cup of coffee in a cafe でもいいですが、if he relaxes over an occasional coffee in a cafe [coffee shop]とする方が筆者の真意の英語化となると思います。なお、relax over (a cup of coffee [tea]) (コーヒー・お茶を一杯飲んで一息つく) はイディオムとして覚えておいてもいい表現です。

■もちろんそのきびしい仕事の世界に生きがいを感じ、情熱を傾けて過ごしているのですが、一生懸命働けば働くほど、聰明に、快活に、立派に仕事をやり遂げるほど、男たちは一日の任務を終えるとき、がっくりと疲れがでるのです。(8510)

★「もちろん」は of course です。

★「そのきびしい仕事の世界に」は in the [this] tough world of work でしょう。

★「生きがいを感じ」は find something to live for; find a sense of purpose など。なお、辞書を見ると「生きがいを感じる」に find one's life worth living (人生、まんざらさて捨てたもんじゃない) を当てていますが、ここでは使えません。

★「情熱を傾ける」は、「仕事に専念するのである」と考えて devote their enthusiasm to their jobs; devote [apply] themselves to it enthusiastically; put their hearts into their work などで

す。「情熱」に passion は避けた方がいいでしょう。この言葉は恋愛とか sexual な意味にもなるので。

★「過ごしている」は「(情熱を傾けて) 過ごしている」と組み合わされているので「(日々) 情熱を傾けている」と考えると訳す必要はないと思いますが、訳出するとすれば、「なんとかやっていく」と解釈して make one's way through life ぐらいです。翻訳としては、日本語にはないけれどつい加えたくなる「日々」(in their daily lives)を表に出した方がいいように思われます。

● [・・・じ] (生きがいを感じ、情熱を傾けて過ごしている)

「もちろんそのきびしい仕事の世界に生きがいを感じ」の主語は、下の方の「男たちは」なので Men としてもよいのですが、この筆者の語り口から言うと Most men (大抵の男) がよいと思われます。ところで、「情熱を傾けて過ごしているのですが」は、「生きがいを感じ」とほぼ同じ比重で用いられているので「～を感じ、[そして] して過ごす」と並置してよいと思います。and です。

● [が] (過ごしているのです [が])

「過ごしているのです [が]」の [が] は「逆接」で but でいいですが、文を切って But… と先頭に使うのは、本当は好まれません。「逆接」の意味を強めて yet を使った方がいいでしょう。

★「一生懸命働けば働くほど」は、いわゆる‘the + 比較級, the + 比較級’の型を使うところです。この部分は the harder they work です。

★「聰明に」は intelligently でしょう。cleverly は表面的な頭のよさを表すので「巧妙に・狡猾に」に近くなります。

★「快活に」は vitally とか energetically でしょう。cheerfully は「陽気に」です。

★「立派に」は、非常に訳しにくい日本語なのですが、ここでは skillfully を使ってもよいと思います。splendidly はかなり主観的になります。

★「仕事をやり遂げる」は accomplish their work でもいいですが、work をもっと具体的な jobs とか tasks にして、簡単に do their jobs[tasks]とした方がいいかもしれません。なお、「仕事をやり遂げる」の work は抽象名詞です。works にすると「作品・行為・工場・工事」などのように、意味が変わってしまいます。それから achieve は「仕事・物事をやり遂げる」というのではなく、そのことによって‘～の境地に達する’というような場合に使います。たとえば、She suffered a great deal, but in old age she achieved peace of mind at last./ After many years of practice he achieved great skill in his work, のように使います。ただ、accomplish と同じ意味で He achieved his task. という例も大きな辞書には出ていると思いますが、これは現在あまり使われない言い方で、古いというか、文学的な感じになります。他に使うとしたら carry through でしょう。get through は駄目です。これは、たとえば、The book was terribly boring, but I finally got through it. のように‘いやいやながら’という意味になることもありますから、避けた方がいいでしょう。

●文解釈（聰明に、快活に、立派に仕事をやり遂げるほど）

「聰明に、快活に、立派に仕事をやり遂げるほど」のところは「聰明に、快活に、立派に」をそのまま三つの副詞を使って、それぞれを‘the + 比較級’で the more intelligently, vitally, and skillfully they do their jobs と書いてもいいですが、少々英語的ではありません。ここは「知力と、活力と、技量を仕事に十分にそそげばそそぐほど・・・」と改めると、「がっくり疲れる・・・」との関係がはっきりします。たぶん、「聰明に、快活に、立派に」は「知力、活力、技量」という抽象名詞を、いかにも女性らしいいたわりの心で男性の活動に言いかえたのでしょうか。したがって、「聰明に、快活に、立派に仕事をやり遂げるほど」は、the greater the intelligence, energy [vitality] and accomplishment they bring to the job [the task] と書くこともできて、この方が英語的です。

★「男たちは一日の任務を終えるとき」は「一日の仕事が終ると〔とき〕」と考えて、at the end of their daily task[work]; once the day's task is over など。

★「がっくりと疲れがでる」は「がっくりと」を「疲れがでる」にかけて the more exhausted they feel としてもいいですが、「はりつめていたものが気落ちし、疲れがどっと出る」と考えて The greater is the sense of letdown and fatigue としてもいいと思います。letdown というのは、何か張り詰めていた気持ちが不意に抜けてしまう感じです。辞書には「失望・落胆」などと出ていると思いますが、本来の意味は決してそうではなく、‘緊張しきっていたものがとなってふと虚しさに似たを感じる’といったニュアンスを伴う言葉です。この「がっくりと」に使えると思います。

■わが家の玄関の扉に手をかけるときの彼らは、もう課長でも副社長でもなく、また将来を有望視されているエリート社員でもないのです。(8510)

★「わが家の玄関の扉」は the front-door of their home でしょう。home の代わりに house を使うと「戸建ての家」になってしまいます。home の方が幅広く使えます。

★「(玄関の扉に) 手をかける」は open the front-door…でいいでしょう。それではちょっと軽すぎるとと思うなら「扉に手をかける」を lift the hatches of their front-doors としてもいいでしょう。なお、turn the front-door handle という言い方は普通しません。

●「・・・とき [の] +人は・・・」(わが家の玄関の扉に手をかけるときの彼らは)

格助詞「[の]」は、日本人好みの「連体修飾節」の似た懸かり方をさせる場合によく用いられる便利な助辞ですが、英語に変換する場合には、たとえば、ここのように副詞節に戻して「・・・とき (には)、人は・・・」と変えて処理するのが適切であろうと思います。ですから、こここの「わが家の玄関の扉に手をかけるときの彼らは」は「わが家の玄関の扉に手をかけたとき、彼らは・・・」とします。ただ、「扉に手をかけるとき」に open the front-door を使うと「瞬時同時」ですから when…ですが、lift the hatches of their front-doors の場合は「暫時同時」ですから as…です。

★「もう～でも～でもなく、また～でもない」は they are no longer ~, ~, or ~です。

★「課長」は the section chief でしょう。

★ 「副社長」は the vice-president です。

★ 「将来を有望視されているエリート社員」は the promising young businessman とか, the promising young member of the business elite くらいでいいでしょう。elite は普通、集合名詞として使われます。なお、promising の代わりに hopeful は使えません。hopeful というと、optimistic という感じで‘本人が将来に望みを抱いている’という感じになります。